



Title	労働者大学とモリス商会 : 教育からデザインの現場へ
Author(s)	横山, 千晶
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71199
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

労働者大学とモリス商会 — 教育からデザインの現場へ

横山千晶 慶應義塾大学

世界の成人教育及び労働者教育の先駆けとなった労働者大学（Working Men's College）は、キリスト教社会主義者の F. D. Maurice を代表として1854年にロンドンで設立された。それまでのメカニクス・インスティテュートや国家主導のデザイン学校とは一線を画すリベラル・アーツ教育がそのカリキュラムの土台となっている。John Ruskin は開校当初より、素描クラスを受け持ち、彼の勧めに応えてラファエル前派兄弟団の画家、Dante Gabriel Rossetti がすぐに講師陣に加わった。この二人を中心として、やがて Ford Madox Brown や Edward Burne-Jones らラファエル前派関係の画家たちが講師として加わっていくことになる。彼らは大学の中で培った様々な関係や交流を基に、1861年モリス・マーシャル・フォークナー商会を立ち上げるようになった。本発表は、今まであまり論じられることのなかった労働者大学と商会の関係を跡付けようとするものである。

1. John Ruskin の教育と国のデザイン学校

ラスキンを主軸とした労働者大学の素描クラスは、Henry Cole や Richard Redgrave が中心となって推進した国家のデザイン学校とは意識的に異なる教育方針とメソッドを採った。つまり後者の商業中心主義に対するリベラル・アーツとしての芸術教育の展開である。デザイン学校がアウトライン、陰影と色合い、そして色彩の順序でカリキュラムを組み、模範となる2次元デザインのコピーに力を入れたのに対して、ラスキンはアウトラインではなく、マッサと陰影を第一に教えた。

その中でラスキンが強調したのは、正しく

「見る力」の体得であり、それはすべての人々が身に着けるべきリベラルな技術、つまり生きることを自由に、豊かにする術であった。

このようにラスキンの素描クラスは、芸術家を育てることを主眼としなかったものの、勤労学生たちに様々な可能性を提示することになる。ラスキンの素描クラスを履修した学生たちの中には、William Ward や George Allen のように版画家、出版者としてラスキンを支えるようになったものもいれば、芸術家として活躍することになる人々、また Ebenezer Cooke のように児童美術教育の第一人者となっていくものもいた。

2. 労働者大学の学生とモリス商会

しかしながら、労働者大学の素描クラスを取っていた学生たちの中には、建築や家具職人、あるいは石版印刷者やデザイナーなど、ものづくりにかかわっている技術者や職人が多数おり、すでに国のデザイン学校で学んで来たものも少なからずいた。労働者大学で教え始めたロセッティは「ほとんど全員が期待していた以上の才能を見せて」おり、確かな素質を備えたものが2、3人いる、と友人に手紙で書き送っている。労働者大学は、基礎的な素描力を備えた職人たちと講師である画家たちが会おう場を提供したのである。

1857年にロセッティはバーン＝ジョウンズと William Morris たちと共に、オクスフォード・ユニオンの討論室の壁画制作に取り組んだ。技術の欠如ゆえに、彼らの壁画はすぐに褪色してしまったが、この時からラファエル前派サークルの芸術家たちは装飾芸術の分野に目を向けていくことになる。

同年、ロセッティはステンドグラス製作会社ジェイズ・パウエル・アンド・サンズから下絵提供の要請を受ける。これはちょうど1818年の新教会法の設立を経てゴシックリバイバルが興り、ステンドグラス製作会社が、新たな市場開発のために新鋭の画家たちの協力を求め始めた時期だった。これを機にバーン＝ジョウンズやブラウンは、パウエル社に下絵を提供し始め、実践を通してステンドグラスの下絵制作技術に磨きをかけていくことになった。

また、1858年の春にラファエル前派兄弟団が事実上解散するころに、ロセッティはブラウンたちとホガース・クラブを立ち上げ、ステンドグラスの下絵のみならず、絵付き家具の制作も行うようになる。絵画にとどまらず、より広い工芸の世界に彼らが乗り出したのは、時代の要請に応える動きでもあった。

労働者大学の入学登録記録を見ると、1858年秋から始まる5年次から入学者の職業として「ガラス絵製作」が散見されるようになる。おそらく彼らとの交流が、1861年4月の商会設立に大きく貢献したことは間違いない。

そのような職人の代表者は、1858年10月開始の学期から素描クラスに入ったGeorge Campfieldである。ステンドグラス製作工場ではガラス絵作成に携わっていたキャンプフィールドは、ラスキンの素描クラスに入ったものの、その才能を見たラスキンに、自分が教えるべきことはない、と言われたという。おそらく当時ロセッティに代わって人物画を教えていたブラウンやバーン＝ジョウンズのクラスに移ったキャンプフィールドの才能は、素描クラスの講師陣の間でも話題になったと思われる。1861年4月に商会が発足する直前に、モリスが商会の職工長として雇い入れたのは、このキャンプフィールドだった。

商会はそれ以外にも労働者大学に入学した

ほかのガラス絵製作者も雇用することになった。大学は、アーティストとアーティザンを結びつける場として機能したのである。

3. 実業工芸学校とモリス商会

商会ははじめに労働者大学が開設され、バーン＝ジョウンズとモリスが共同で住んでいたレッド・ライオン・スクエアで開業したが、開業年の終わりには近隣のユーストン・ロード44番にあった実業工芸学校の少年たちを雇い入れたことが知られている。この施設は1857年にできたIndustrial School Act（実業工芸学校法）のもとに1858年2月に開設された福祉教育施設だった。若い少年少女たちが犯罪に陥る防止策として設立されたこれらの学校では、一般科目のほかに、仕立て、製靴、家具作りなどの実技が教えられた。

ユーストン・ロード44番の実業工芸学校を商会設立者たちに紹介したのは、ホガース・クラブのメンバーでもあるColonel W. J. Gillumであったことは知られている。彼は1860年にこの学校のことを知ると、すぐさま運営委員会のメンバーになっていた。

しかし、1858年初頭の学校創設当時、運営委員会の11人のメンバーの中に、労働者大学創設の主要メンバーであるモーリスとThomas Hughesが名を連ねていることは注目してよい。1859年12月には、二人は学校を訪れて、学生たちの作業所を視察していることが新聞でも報じられている。おそらくその様子は労働者大学にかかわっていたラスキンやロセッティ、ブラウン、バーン＝ジョウンズたちとも共有されたのではないだろうか。

4. 結論

このように、労働者大学は画家たちが職人を教える場のみならず、職人たちが画家たちに手仕事の技術を伝え、協働する場を提供した。また、大学の外の世界とも連携することで、商会の土台構築の一端を担ったのである。